

「まねき猫のせなか」まだらすかる

新幹線の車窓から京都らしさは感じられなかった。

京都に来るのは、私が5歳の時以来15年ぶりになる。父がまだ生きていた時だった。思えば子供の頃から、将来の夢だとか、憧れの職業なんものはなかったような気がする。高校生の時に、自分の進路を考えなければならなくて、それまで何も考えてなかった私は、死んだ父がITの会社で働いていたのを思い出した。

奨学金で学費さえ払えば卒業できる専門学校を出ると、よく分からないままIT人材の派遣会社に就職した。女子の少ない専門学校でちやほやされていた私には何の危機感も無かった。入社するとすぐに派遣先の会社に配置されたが、専門学校を出たばかりの私に何か出来る訳もなく、自分が何をすればいいかも分からなかった。

初めのうちは質問すれば優しく教えてくれた派遣先の人も、質問ばかりで何の成果も出せない私に、次第に溜め息ばかりを返すようになった。人に質問することさえ怖くなった私は、成長しないまま何の成果も出すことなく、誰かの役に立つこともなく、ひと月で派遣先の契約を切られてしまい、やがて派遣先を転々とする会社のお荷物になってしまった。そして社会人になって半年が過ぎようとした頃、行く先々で人様に迷惑をかけている自分が居たたまれなくなって、後先を考えずに会社を辞めてしまった。

何もできない。何者でもない私。

子供の頃に、自分がこんな大人になるなんて想像できただろうか。

こんな大人になった私を見てどう思うだろうか。

京都駅から電車を3度乗り継ぎ、竹林で有名な観光地『嵐山』行きの電車に乗る。子供の頃にも来たはずだけど、見える景色に全く覚えが無く、懐かしさは感じない。父の実家が大阪で、京都にも何度も連れて行って貰ったはずなのに。子供の頃の記憶で今も鮮明に残っているのは、父との最後の思い出、そして父の最後の姿だけ。

——あの日、私は父に肩車してもらっていた。背の高い父の肩の上から見る景色が大好きだった。

私は肩車をしている父に、ほんの悪戯心いたずらいしこみで、両手で目隠しをした。

「こらこら、前が見えへんよお、あははははは。むずきは大したお嬢さんやで」

笑いながら、父はふらふらと車道に飛び出した。そして、走行中のトラックに撥ねられた。父の肩の上に居たはずの私は、気がつくのとトラックの荷台にいて、すり傷だけで済んだ。

「わしがダビデ二中のブザービーターや！」

父はそう叫んで咄嗟に私を、向かって来るトラックの荷台に投げ入れたのだ。これが父の最後の言葉だった。

葬儀で目にした父の顔は、包帯が何重にも巻かれていた。遺影が見せる父の優しい目を確認することは出来なかった――。

結局大人になっても変わらず人に迷惑をかけている。父の死は私のせいだ。その事を負い目に感じて何事にも奥手になっているが、結局変わらない。今回のように衝動的に行動に移すのは初めての事で、これが何かの転機になるような気がした。

目的地の最寄り駅に着いた。降りたのは嵐山のひとつ前の駅。駅を出ると、すぐ目の前に朱色の巨大な鳥居が私を見下ろすように立っていた。ここも名の知れた観光地なんだろう。私は鳥居の奥に見える神社を横目に、真っ直ぐ住宅街に入ってしまった。

そう、京都へは観光目的で来たのではない。

――会社を退職した日、家に帰ると郵便受けに宛名の違う郵便物が入っていた。

私の前に住んでいた人だろうか、郵便物はビニール封筒に入ったフリーペーパーのような、薄い雑誌だった。

「招き猫通信……?」

ずいぶんニッチな分野の情報誌だ。不定期に発行されているのだろうか。2年半住んでいて、私の部屋の郵便受けに入っていたのは今回が初めてだ。発行元に問い合わせて住所が違うことを知らせてあげるべきなんだろうが、私はただ興味本位で封を開けてしまった。

雑誌には部屋を覆い尽くすような沢山の招き猫に囲まれて、真っ白な招き猫を睨みながら筆を構えるお爺さんの写真が掲載されていた。絵付け職人と言うのか。こんな可愛い招き猫に囲まれて、こんな風にただ色を塗るなら何とも気楽な仕事だと思った。それなのにクリエイティブで、毎日作品を残してる。堪らなく羨ましいと思った。

写真の下にはお爺さんのインタビュー記事が掲載されていた。そこには、後継者が居なくなり、店を畳まなければならない、というお爺さんの悩みが書かれていた。私は「これはチャンスだ」と思い、すぐに荷支度をして、翌朝には家を出た――。

その招き猫の絵付けをしているお爺さんが、この京都に居るのだ。

住宅街の緩い坂道をしばらく登っていくと、竹林が見えた。嵐山とは違うようだが、タクシーが2台、観光客を待っているようだ。そのタクシーを囲むように猫が集まっていた。その姿を写真に収めようとスマホ片手に近づくと、猫たちは一目散に逃げ去った。タクシーの運転手さんが笑っ

ているのに気が付いて、恥ずかしくなった私も逃げるようにその場を離れた。

目的の場所はスマホのマップだとすぐ近くなのだけれど、目印になるものが無くて見つけれなかった。歩き詰めで喉が渴いたら、さっきのタクシー乗り場に自販機があったのを思い出したので来た道を戻ろうとすると、丸々と太った灰色の猫がこちらを睨んでいた。

「あら、キミは逃げないんだね」

チャンスとばかりにスマホをカメラに切り替えて、太つちよな猫を写真に収めた。撮れた写真を見て、思わず笑ってしまった。

「キミ、頭おつきいねー」

灰色の太つちよはギラツとした目で私を睨み付けると、振り向いてノシノシと歩いていった。

「ごめんごめん、キミも逃げちやうのね」

「ニヤー」

灰色の太つちよは足を止めて、私の方を振り向いて鳴いた。

「……え？」

何やら呼ばれてるように思えたので、再びノシノシと歩き出した灰色の太つちよに付いて行った。

後を追って間もなく、太つちよは一軒の民家に入っていった。そこは目的の場所『水脇陶香堂』みずわきとうかじょうだった。見た目はごく普通の住宅だ。もっと古民家風な建物を想像していたので、気が付かずに通り過ぎていたのだ。確かに「招き猫」と書かれた貼紙が玄関に貼ってある。

「ニヤー」

太つちよが鳴きながら玄関の扉をガリガリと引つ掻いている。

「はいはいはい、もう堪忍してくれんやろか」

扉の向こうで履物を履く音が聞こえ、チリンという鈴の音と共に、扉が開けられた。開いた扉から顔を出したのは、雑誌で見たお爺さんだった。

「あー、いらっしやい」

「あ、あの、私、今朝お電話した鳥野とりのです。本日は、その……」

「あー、ほんまに来はったんか。わざわざ遠いとこ、ご苦労さんで」

「あ……はい……」

萎縮してしまった。考えてみれば、いきなり来て迷惑だっただろう。もっと歓迎されるものだと期待して来た私が馬鹿だった。

「ニヤー」

「ん……はいはいはい、まあ、とりあえず中入り」

「あ、はい。失礼します」

「……そやなあ、ちよつと準備するさかい、荷物はそこら辺置いて、店ん中でも見ときなはれ」

「あ、はい」

店の中は雑誌で見た通り、沢山の招き猫が隙間なく並んでいた。どれも繊細な色使いをしたものばかりで、よくある土産物とは一味違って見えた。

そんな中、ずいぶんとコミカルな顔が描かれた招き猫が一体だけ、異彩を放っていた。にっこりと笑顔を浮かべて、体にはシンプルな配色の花柄が施されたその招き猫にだけ、真っ赤な座布団が敷かれていた。これくらいなら私でも簡単に作れそう。大事に扱われているのが不思議に思えた。

「あー、そや、あんた履歴書は持って来たんか？」

奥の部屋から、お爺さんが戻って来た。

「えっ？ 履歴書ですか？」

それはそう。私はここに働きに来たのだ。普通の会社に面接に来るなら、履歴書くらい持って来るのは常識だ。

「……そやな、こない小さな工房やさかいな、普通の企業さんと違って顔見ただけで入れてくれる思うんもしやーないな。……ほら、あんたべっぴんさんやしなあ？」

「あ、いえ、いえ、失礼しました。忘れてました……」

別に小さな工房だと甘く見ていたつもりはないのだが、職人の家に飛び込みで弟子入り志願するようなイメージで、まさかこんなお爺さんから履歴書を求められるなんて考えてもいなかった。

お爺さんは棚から一枚の紙を取り出し、鉛筆と一緒に私に差し出した。

「これに、あんたの名前と……そやな、年齢と出身地くらい書いてらええ」

「あ、はい、ありがとうございます」

私は言われるままに紙に書いて、お爺さんが戻って来るまでじっと待った。戻って来たお爺さんの手には小さな無地の招き猫と、筆と絵の具の入った小皿があった。

「あんた……えーと、むつきさん？」

紙に書いた私の名前を見てお爺さんが言った。

「あ、いえ、睦月と書いて、むずき」と読みます。すに濁点です。母の名が、みずきなので。ちなんで」

「……ほお、むずきさん、鳥野睦月……さん、ね。はい。

わしは水脇益雄、言いますねや。どうぞよろしゅう」

「あ、はい、よろしく願います」

「睦月さんは、絵は、描けるか？」

「絵ですか……はい、あの、フォトショとかで、ペンタブ使って、少し。あ、でも、イラレはよく分からなくて」

「……何言うてるか全然分からんけど、描きはるんやな」

「あつ、はい、すみません、大丈夫です。はい」

水脇さんが持って来た無地の招き猫と、筆と小皿を受け取った。早速この招き猫に絵付けするか、弟子入りの為の試験なのだろう。

「まずは自分なりにな。時間はなんぼ使ってもええから、これが売りもんになる思って、絵付けしてみなはれ」

「……は、はい、やってみます」

こんな風に筆を握るのは何年ぶりだろう。私は絵を描くのが好きな子供だった。ほとんど記憶にないけれど、何かのワークショップでこういう絵付け体験をしたこともあったと思う。専門学生時代の有り余る時間にパソコンでイラストを描こうと挑戦したこともある。長続きはしなかったけど。

ひとまず周りにある招き猫達の中でも比較的シンプルで描きやすそうな子を参考に、色を塗っていく。小皿に入っていた絵の具は少なく、赤白黒の3色だけだ。人形の顔のわずかに凹んだ部分に黒目を描き、耳と口元は赤で塗った。これだけで猫の顔はほとんど完成となる。おまけ程度にヒゲ、首輪、手のひらの肉球を赤色で描いた。シンプルだけど、これで完成。あまりやる事は無かった。鈴に塗る色が無いので、鈴は空けておいた。少し味気ないが、初めてならこんなものだろう。

「……出来ました」

「もうか？ まだ30分も経ってへんけどな。どれ、そんなら拝見させてもらいましょか」

参考にした招き猫には遠く及ばないが、自分なりに初めてにしては上手く出来たと思う。

「鈴はどないしたん？」

「え……？」

「この子、鈴無くしてしもたんか？」

「あ、いえ、塗ろうと思ったんですけど、色が無くて……」

「……言うてくれはったら出したんやけどな」

「え……そんな……」

普通は渡された絵の具だけで仕上げるものだと思うものでしょう。これには納得がいかず、意地悪をされたと少しだけ腹が立った。そして水脇さんが招き猫を裏返し、背面に目を向けた瞬間、私が最も恐れるリアクションが返って来た。

「はあ……」

前の職場で何度聞いたことだろう。

水脇さんは私に聞こえるくらいの大きな溜め息を吐いて、呆れた様子で頭をぼりぼりと掻いた。

「人形の絵付けやからな、塗り絵とはちゃうねや」

この猫さん、背中が寂しいことになって可哀想やわ」

言われて初めて気が付いた。人目につかない招き猫の裏側なんて全く気にも留めなかった。

「……あんだ、なんでこの仕事しようと思ったんや？」

「え……あ、あの、クリエイティブな、仕事に憧れていて、招き猫が好きで、招き猫通信を読んで、それで……」

正直には言えなかった。何かクリエイティブな仕事がしたいとは思っていたが、仕事にするほど

招き猫が好きな訳でもなく、ただ自分でも出来そうな仕事を求めていたのが正直な理由だ。

「……以前は何の仕事してはったの？」

「あ、あのITの会社で、コンピュータで、こう……カタカタッて……その」

「ああ、プログラマー言うやつか？ ほお、そらすごいやないの。」

「十分クリエイティブな仕事やないんか？」

「あ、いえ、そういう仕事ですけど、私はプログラム出来なくて……」

「何作ってるかも分かんなくて」

「そうか、出来なくて辞めたんやな」

「は、はい……」

「さっき『自分なりに』て、言ったりやる？ 自分なりに納得いくもん作るんが、物作り言うんや。」

「あんたは、これで自分なりに納得いったんか？」

「い、いえ……」

「そうやるな。あんたは、自分なりの妥協点探して出来ました言うただけや。それは職人のやることやない。商売人のやることや。『勉強させてもらいます』言うてな。せやけど、職人には割引くもんあらへんねや」

「は、はあ……すいません」

「ああ、謝ることやない。ああ、年取ると説教臭くてあかんあ……」

水脇さんはまた頭をぼりぼりと掻きながら、何か思い出したように、私がさつき見ていたコミカルな笑顔の招き猫を拾い上げた。

「これ、あんたにあげるわ。売りもんやないけどな、よう出来てはるやろ」

「え……あ、ありがとうございます」

これを手本にしろ、という意味なのだろうか。

改めて見ても、私が描いたものより下手な作品に見えるけれど、言われてみればたしかに背中に花柄模様が描かれていて、シンプルだけど手は入ってるのかもしれない。見てると味のある作品と言えるような気がしてきた。

「もう日が暮れてしまうたな。続きは明日にしよか。あんた、宿は取ってはるの？」

「あ、いえ……まだです」

「この辺は高いからなあ、東京からはる来はったことやし、あんたが良ければ2階の部屋が空いてるさかい、好きにしたらええ」

「え……いいんですか？ すいません、突然来てお邪魔になって……」

「食事の世話まではいいひんけどな。食事に無頓着なジジイ一人の生活やさかい」

「あ、大丈夫です。今夜食べる分はあるので、お構いなく」

お昼に新幹線の中で食べようと買ったコンビニのおにぎりが残っている。今夜はこれで十分だ。こんな状況じゃ食欲も湧かない。

「そうか、ほならわしは外に蕎麦でも食べ行くさかいな。もし外出するなら、鍵はここ置いてくわ」
「あ、はい、ありがとうございます……」

水脇さんが外に出て行くのを確認してから、私は自分の荷物と頂いた招き猫を持って2階に上がった。

「はあ……また、ダメ……」

階段を上がる途中で、身体の力が抜けてうなだれた。

今回もダメだった。私なりに何かを変えようと、思い切った行動に出たのに、結局何も変わらなかった。こんなどこまで何しに来たんだろう、明日は早い内に諦めて東京に帰るつもりでいよう。

2階に上がると部屋は1つしかなかった。この部屋を使っているのだろう。部屋は6畳ほどの広さの和室で、丁寧に畳まれた布団一式と小さなテーブルに小さな電気ストーブがある。部屋の隅には本棚と洋服箆笥の隣に上半身裸のおじさんがいる。

「ん……？ えっ？」

部屋には先客がいたのだ。それも上半身裸のおじさんが。

下に履いているのもオムツのように膨らんだ白のパンツ一枚だけ。下っ腹が出てだらしない上半身、足の裏が汚れた灰色の靴下。後頭部まで後退した生え際、長くボサボサした襟足。薄暗い室内なのにサングラスをかけ、頭には猫耳がついている。そして両手には、肉球のデザインをあしらった丸い大きなグローブをはめている。

「きゃっ！ へ……変態ッ!？」

「誰が変態や!？」

見るからに変態なのに、間髪入れずに否定してきた。

「こんな変態がどこにおるかいな」

「め、目の前に……いい、いやっ!？」

私は気が動転して、先ほど頂いたばかりの招き猫を変態に投げつけようと構えた。

「待って待って！ なんでや、わしが先におったんやんか！ 先住民狩るんか？」

「どえらい訪問者やな」

言われてみればそうだ。私は今日この家に来たばかりで、この家の事情など何も知らない。この人は変な格好をしているが、水脇さんの家族か親戚なのかもしれない。

「置けっ、まずはそれ置けっ」

「あ、はい……」

私は言われるまま、招き猫を床にそっと置いた。

「ま……つたく、ラブ&ピースやろがい!？」

「……はい、すみません。でも、水脇さんが2階は空いてるって言ったので、まさか人が居たなんて……」

「人お？ どこに人がおんねん」

「え……あ、あの、あなたが……」

「わしか？ わしが人に見えるんか？ おもしろいやっちゃな」

この人は何を言ってるんだろう。少なくとも変質者には見えるが、それを言うのも失礼なので、まずは話を合わせることにした。

「えっと……じゃあ何ですか？」

「そらお前、どっからどう見ても『招き猫』やろが」

「ま、招き猫……？」

そういう冗談なんだろうか、絵面が汚過ぎて笑えなかった。

「あ、それで……猫耳つけて。あ、そういう……す、すごいですね」

「頭に猫耳つけとんちやうぞ。耳はこれしか無いやろがい」

言われて気が付いてゾツとした。本来、あるべき場所に耳が無いのだ。そして猫耳は禿げた頭から直接生えてるように見えた。

「えっ、えっ？ み、耳どうしたんですか？ あ、頭のその猫耳も、いったいどうなって……えっ？」

「動かしたるわ、ほら」

変態は頭の猫耳をピクピクと動かし始めた。もう自分が何を見ているのか、分からなくなってきた。頭が混乱して涙が出てきた。

「ど、ごめんなさい……許してください……」

「なんでや！ なんで泣くねん！ 招き猫やぞ！」

「ち、違う……こんなの、招き猫じゃない、全然、全然可愛くないし……」

いや、それ以前になんか……」

「お前がこんな風に絵付けしたんやろがい!!」

急に激しく怒鳴られて、驚いた私は泣くのをやめた。

「え……？ それって、どういう……ことですか……？」

「わしはなあ、お前がさっき生み出した招き猫や」

「こ、こんなモンスター生み出してない……」

「誰がモンスターや！ ピ〇チューちやうぞ。」

「え……だって、私のと、全然デザイン違うじゃないですか……」

「デザインの問題やないわい。われが、いい加減にしくさりやがってこんななつとんねん」

「いや……にしても酷くないですか？ こんなの……」

「酷いことされとんのは、わしの方じゃ！ 見てみい、この腹あ。なあくんも手え付けんと、放つとるからこんなわがまま豊満ボディになつとんぞ」

「いや、でも、白い猫もいるじゃないですか。模様塗らなくても別に……」

「どこ参考にして描いとんねん、他のもんは小判持とつたやろがい！ お腹の小判のスペースん

と少し盛り上がつとるのに気付かんかったんか!」

「え……? あっ!」

頂いた招き猫も確かにお腹に小判を抱えている。同じ型の人形なら、私が絵付けした招き猫も、同じようにお腹の小判の部分が少し盛り上がっていたのかもしれない。

「お前が何も塗らんと下っ腹と同化されてしまったやないかい。どないすんねん、わしのシックスパツク。どないすんねん!」

「す、すみません……でも、金の絵の具なかつたので……」

「なかつたら、われ。あのジジイの胸ぐら掴んで絵の具催促せんかい!」

「いや、そんな……あれだけ渡されたら、渡されたものだけでやる試験だつて思うじゃないですか」

「売りもんになる思えて言うたやるがい、学校のテストちやうぞ。仕事やぞ? だいたい、あれだけやと思たんやったら、赤と白混ぜてピンクの小判にでもしたらんかい。鈴もや。工夫せえ!」

「ピンクの小判と鈴ですか……」

「そや、したらお前、わし、可愛らしいプリーティーにやんにやんになつとるやるがい」

「はあ……」

何を言ってるかよく分からないし、そもそもまだ目の前の情報を上手く頭で処理出来ていない。

「あの……」

「なんや?」

「えつと……あなたは、私が絵付けをしたから、私の前に現れたんですか?」

「最初から居た訳じゃなくて……?」

「こんなもん最初からおったら、どえらいこっちゃで、ハハッ」

「あはは……」

「何笑ろてんねん!」

「す、すみません……じゃあ……明日も、もし私が下手な絵付けしたら、またここにいますか?」

「おつたら悪いんか? 明日また今日みたいな仕事してみい、そいで3体くらい作つてこの部屋戻つてみいや。わしみたいのが3体増えとるぞ」

「も、もう……帰りたい……」

「帰つてどないすんねん」

「……もつと楽な仕事探す……」

「楽な仕事でなんやねん」

「……私でも、出来る仕事……」

「お前に何ができんねん!」

「……だからっ、それを探してるんですよ!」

この、先の見えない押し問答と、先の見えない自分の将来がもどかしく、ついイラ立って声を荒げてしまった。

「何言うどんねん、最初から出来る仕事なんかあるかい。」

「え、それって矛盾してませんか？ 私の仕事の出来が悪くて、水脇さんも、あなたも、私に怒ってるんですよ？」

「ほんまに、わからんやつちやな。……見てみい、この背中」

そう言って座ったまま、私に背を向けた。

招き猫のおじさんの背中は悲壮感が漂っていた。丸まって貧相に見え、その太った体よりも遙かに小さく見える。

「これが、男の背中や。……どや？」

「スゴく……小さいです……」

「せやろが。何でこんな哀れな背中にさせられたんか、わかるか？」

「……あ、私が、背中に絵付けしなかったから？」

「人目ん付くオモテっ面ばつかりに氣い取られとんちやうか？ ……いや、ちやうな。首輪も前しか塗つとらんかったからな。人目に付かんとこサボったんとちやうか？」

「い、いえ……招き猫の背中なんて、一度も氣にしたこと無かったので……そんなに重要だなんて」

「そういうとこやぞ」

「え、えつと……つまりどういうことですか？ 観察力がないってことですか？」

「ちやうわ。われは真剣に向き合つとらんねん。仕事にも。人生にも。せやろ？」

「……」

何も言い返せなかった。わかつてはいるつもりだけど、今まで考えないようにしていたことだから。

「職人ちゆうもんはな、情熱やぞ。情熱のパッションや！ 技術なんぞ後から付いてくるもんや」

「情熱の……パッション。……『パッション』てどういう意味ですか？」

「スマホ持つとんなら、わがで調べんかい」

「あ……はい、すみません。パッション……えつと……『パッション』は、

あの……じ、情熱……です」

「……せやろが！ 職人ちゆうもんはな、情熱×情熱×情熱×の……」

もお……100%掛けたるわ！ わかるか!? 伝わるとるか!? わからんでも傳われ!」

「えつと……わからないです。わからないですけど……なんとなく、伝わりました」

「そうか、んならもうええな？」

「あ、はいっ！ お疲れ様でした。」

「……おう、お疲れさんっ！ ……つて、わしは帰らへんぞ!」

「じゃあ、どうしたらいいんですかっ？ 絶対嫌ですよ、こんなと相部屋なんて」

「……おい、弟子入りに来て初日から一人部屋求めるんか。わしの弟子やないけど、凶々しいやつちやな。しゃーないな、ほんなら今からわしと勝負せい」

「勝負？ 招き猫の絵付け勝負ですか？」

「なんでやねん、わし招き猫やぞ！ 猫が筆握れるか！」

「じゃあ、何を……？」

「野球拳や、野球拳でわしに勝ったら、ここ出てったるわ」

「は!! ……絶対嫌です！ 野球拳だって、その手でジャンケン出来ないじゃないですか。それ何ですか？ グー？」

招き猫のおじさんは両手に肉球デザインの丸い鍋掴みのようなグローブをはめている。

「パーや。これはパー。グーなら……こ、こうや」

肉球グローブがくしゃつと折れ曲がった。

「ど、どや……!! これがグーや！」

「じゃあ、チョキは？」

「チョ……ッ!? チョ……チョ、ぬ、ぬううう……ああ！ やったらああッ!!」

肉球が再びぐしゃつと折れ曲がったが、それは見た目にはグーと変わりなかった。

「それグーですよ。やつぱり出来てないじゃないですか。」

「うっさいわ！ チョキできる猫おるか？ チョキなしでもええやろ」

「だったら私の勝ち確定じゃないですか？ チョキ出ないって分かっていたら、パー出したら絶対負けないですから」

「ほんなら、やってみるか？ 負けたら約束通り出てったるわ」

「……いいですよ。約束守ってくださいね」

「アウト！」

「セーフ！」

「よよいの……よよい！」

二人とも、出したのはパーだった。

「あいこか……やるやないかい」

「そりやそうでしょ。私はパー出してれば少なくとも負けはないんだし、あなたはグー出したら負けるからパーしか出せないんだから」

「だったらチョキ出せばええやないかい」

「私がチョキ出して、そっちがグー出したら私の負けじゃないですか」

「チョキ出さな勝てへんぞ。わしが簡単にグー出す思うか？」

「……」

そう言って、私にチョキを出させて、自分はグーを出して勝負を決める作戦だろう。こんな簡単な罠に誘導される訳にはいかない。

「第二戦や！ アウト！」

「セーフ！」

「よよいの……よよい！」

またしても、二人が出したのはパーだった。

「またあいこか、勿体ないのお」

「あれ……」

誘導したのかと思い、私がパーを出すのを読まれてたのだろうか。

「もう一回や。チョキ出さな、われ勝たれへんぞ」

「アウト！」

「セーフ！」

「よよいの……よよい！」

またも二人が出したのはパー。

「おいおい、一生続くぞー？」

「だ、だって……こっちはパーしか出せないじゃないですか」

「チョキ出さな勝たれへんのに、パーしか出せんか？ それじゃ何も変わらへんぞ」

「……わかってます、けど！」

「もうええ、脱げ！ 脱いだら解る。自分の殻を脱ぎ捨てえ！」

「嫌ですよ！ 何で勝敗関係なく脱ぐんですか」

「卵が先か、鶏が先かや。何を守るもんがあんねん、年端もいかん小娘が。恥かいてもええやないか。わしを見てみい！ パンイチやぞ。捕まったって構へんぞ。誰がなんと言おうとこれがわしやからな。これが、自分の生き方と真剣に向き合つとる証やからな。世間様にどう見られようと、これがわしの生き方やからな！」

「そ、それを変態と言うのでは……」

「変態でええねん！ しよーもないもん守って、何も出来へん、何も変わらへんより、ずっとええねん！」

確かにそうだ……私は前職でも失敗を恐れて、人に答えばかり求めていた。自分で調べもせず、試してみることもせず、それで成長しないで溜め息ばかり吐かれていた。

ここに来たのもそうだ。簡単だから自分でも出来そうだという気持ちで来て、一番簡単そうなシンプルな招き猫を参考にして、目に見える所だけ絵付けをした。この招き猫のおじさんの言う通り、こんなことでは、何も変わらないのだ。

「……わかりました」

「お？ 脱ぐんか？」

「……脱ぎませんけど、真剣に、勝負に行きます」

「よっしや、勝利のVサイン、頼むで」

私は覚悟を決めて、立ち上がった。

招き猫のおじさんも立ち上がった。

「アウト！」

「セーフ！」

「よよいの……よよい！」

招き猫のおじさんが出したのは、グーだった。

「フ……フフ……」

「な、なんでや……完全に今のは、チョキを出す流れやったやろ！　なんでまたパーやねん！」

「……私気付いたんです。あなたの、自分の生き方に真剣に向き合ってるって言葉に、嘘があることを」

「う、嘘やて？　なんや……どこに嘘があんねん」

「そのサングラスです。守るものが無いように言って、サングラスでプライバシーを守ってる！」

「な、な……この、サングラスは……」

「そんなんじや、変態の風上にも置けません」

「う、うう……そんなんで」

「私が私なりに、この勝負に真剣に向き合った結果です。この勝利は」

「ま、参った……わしの完敗や……。約束通り、ここから……」

招き猫のおじさんは部屋の出口に向かって、のそのそと歩いて行った。

「……待つて。そのサングラス取ってください。野球拳ですから」

「せやな、せやったな。これは野球拳や。まったく、ダビデ二中の賭博王と呼ばれたこのわしを、

野球拳で打ち負かすとはな。やっぱり、むずきは大したお嬢さんやで」

聞き覚えのある言葉に、一瞬間が真っ白になった。

サングラスを取った招き猫のおじさんの目は、あの優しい父の目のものだった。

「あ……お、お父……さん？」

「これでもう心配はいらんな。この調子で、真剣に自分の仕事と向き合っていくんやで？」

「お父さんのの!?　どうして……どうしてそんな姿に？」

「あの日、トラックに撥ねられた後、父さんは異世界に転生したんや。獣人族としてな」

「獣人族……獣人って、そんななんだ……」

「そや、だいたいこんなやで。そいでな、異世界の街の人に色々話聞いたとったら、なんや、魔王と

かいう悪い奴がおるらしくな。ほんならわしが倒したるわくって口約束してもうてな」

「そんな軽い感じで危険なことしないでよ……」

「んで魔王はんとこ行ったら、戦う前に魔王はんに『最期にやり残したことあるか?』て言われて

な。娘が今どないしとるんか気になるって答えたんや」

「そしたら魔王はん、粹な計らいで今のむずきの姿を魔法の玉に映して見せてくれたんや。そして、なんや仕事や人生に行き詰まっとる姿が映とってな。魔王はんにお願ひして、ちよつとだけこっちの世界に転送してもらたって訳や」

「そ、そうなんだ……心配かけて、ごめん」

「何謝っとんねん。我が子の心配して助けてやるんが親の務めや。異世界を救うことよりもずっと大事な務めやで」

「ありがとう……でも、私……この仕事でやっていけるのかな？ 何となく、その、真剣に向き合うことが出来たとしても……」

「なくんも心配いらへん。ほら……さっき、わしにぶつけようとしたその招き猫な。むずきが5歳の時に作ったもんやで」

「これ？ ……え、私がこの招き猫の絵付けを？ もしかして、私ここに来たことがある？」

「やっぱり覚えとらんかったか。絵付け体験でここに来たんや。5歳でこれは立派な出来やで。水脇のジジイもえらい褒めとったわ。それを喜んだむずきは、あのジジイにその招き猫をプレゼントしてもうたんや」

「あは、せっかく作ったのに、家に持って帰らなかつたんだ」

「そうや、その頃から既に職人の気質があつたんやなあ。店先に飾ってたらな、それを買いたいつて言うお客さんも仰山ぎょうさんおつたらしいけどな」

「これを私が……」

手に取った招き猫の表情からは、当時の私がいかに幸せだったかが感じられる。

「今の私に、こんな招き猫が、作れるかな……？」

「大丈夫や。こんだけ才能があるんやから、あとはわかるな？ ……情熱のパッションや」

「情熱のパッション……」

「そや、情熱のパッション燃やしてファイアや」

「さらに分からなくなってきたけど、分からな過ぎて何だか分かった気がする」

「せやろ、まあ、要するに仕事も人生も真剣 LOVE っちゅーことや」

「うん……わかった。ありがとう、もう心配かけたりしないから」

「この先、壁にぶち当たっても途方にくれるんやないで。したらな、魔王はん待たせとるから……父さん行くで」

「えっ！ 魔王ずつと待ってるの？」

「そや、スマホ無くても5時間は人待てるタイプって言つとったけどな。実はもう6時間以上経つとんねん」

「それはまずいよね……私からもお礼言っておいてね」

「大丈夫や、魔王はんには京都土産に八つ橋買つとくからな。でもまあ、そのあとぶっ倒すけどな」

「……もう、行くの？」

「行かなあかん。でも大丈夫や。むずきが招き猫に立派な背中を描いてくれたら、それがわしの力になる」

「……うん。任せて」

「あとな、母さんには内緒にしといてな」

「……うん、大丈夫。この状況を説明できる自信ない」

「……したらな」

「あっ……ちよつと待って」

部屋を出ようとすると父の寂しい背中を見て、私は咄嗟とっさに呼び止めた。

「ん？ なんや」

「実の娘に……野球拳挑んだこと、許さないからね」

違う、本当は、色々な話を聞いて欲しかった。

父を失ったあの日から、今日まで色々なことがあったって、聞いて欲しかった。

「……堪忍な」

そう応えた父の申し訳なきような表情には、私が伝えたい全てに対する謝罪の意味が込められているようだった。その表情を見て、もう二度と父に会えないことを悟った。そして部屋の出口に光の渦が出現し、父はその光の渦の中に消えて行った。

「……あ！ 八つ橋は!?!」

「あ、そうやった、忘れるとこやった。魔王はんに殺されるで」

光の渦から出てきた父は、足早に階段を駆け下りて行った。

私は興奮が冷めない内に1階の工房に戻り、自分が絵付けした背中の寂しい招き猫を拾い上げ、適当に筆や絵の具を借りて2階に上がった。夜が明けても絵付けは終わらなかった。こんなに物事に夢中になったのは人生で初めてかもしれない。

「おはようさん……うおっ！ あんた何してはんの!?!」

「風神雷神図ふうじんらいじんずです。俵屋宗達たわらやそうたつの有名な屏風絵。スマホで調べて、猫ちゃんの背中に頑張って模写したんですよ。立派な背中にしてあげようと思って、迫力あるでしょう?」

「ど、どえらいもん作りはったな……」

「まだまだ、自分なりに納得のいくまで、やってみます」

「うん……そういうことやないんやけどな。わしが言いたかったんわ」

水脇さんは頭をぼりぼりと掻きながら、しばらく私の作業を眺めていた。

「……いや、そういうことやな」

「ニヤー」

1階の玄関から、猫の鳴き声と扉をガリガリ擦る音が聞こえた。

「あーはいはい。今行くわ」

水脇さんは玄関の扉を開け、灰色の太つちよ猫を迎え入れた。

「この化け猫め、あの子に何を吹き込んだんや」

「ニヤー」